

SSKO

Remission

2022/9/11
NO.232

栃木DARC News Letter

目次

- P1 栃木DARC代表
「価値観」
- P2 3sc施設長
「トレンド」
- P3 3scメンバーメッセージ
「自分が歩くべき道」
- P4 PPメンバーメッセージ
「真のクリーンを
目指して！」
- P5 1stメンバーメッセージ
「凡庸なる人間の姿」
- P6 プログラム風景と紹介
編集後記
- P7 8月のステップアップ
8月の献金、献品
施設報告
- P8 CFメンバーメッセージ
「将来」
- P9 2ndメンバーメッセージ
「今の気持ち」
- P10 今月活動予定



栃木 DARC®

「価値観」

特定非営利活動法人 栃木DARC
代表理事 栗坪千明

9月に入り、暑さも弱まり、すごしやすくなってきました。反面水の災害が多くなってきています。コロナ禍において、行動が自粛されている日々がまだまだ続いております。皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

そんな中先月の末にコカインの一大生産地であるコロンビア大統領が、コカインの使用を合法化するという検討を開始するという声明を出し、その三日後に同法相が合法化することはないという声明を出しました。この報道を読むだけで、政府の混乱が想像できます。

欧米の国のいくつかが大麻を合法化している中、とうとうコカインも合法化になるのかと随分価値観が変わるのが早いなと思ったのですが、そんなことはなかったみたいですね。

当たり前のことですが、違法ドラッグは反社会組織の資金源になります。古くは禁酒法時代のマフィアの資金源であり、南米の麻薬カルテルは政府よりも力を持つと言われている時期がありました。またドラッグの乱用その先にある依存は中国のアヘン戦争にも見られるように国の弱体化にも繋がります。もちろんそれは乱用をする人たちもわかっていることです。ではなぜそういった悪意によって稼ぐことができるのかということです。それはあくまで人間の快

楽に対する欲求が生んでいくものなので、この問題は未来永劫なくならないのではないかと思ってしまう。

もちろん私はダルクと代表としては合法、非合法については意見を持つ立場にはありませんが、ダルク開設時の20年前と比較すると世界的に大きな変化が起きていることは間違いありません。当時私は研究者の方々とアメリカの施設に研修に行く機会が幾度かあったのですが、欧米と日本の薬物に対する考え方の違いについては感じていました。欧米はキリスト教の考え方なのか、道を外れても悔い改めれば道は開かれるという考え方に元づいているのか、依存症を一過性の病として、手助けをすれば必ず回復できるという感覚かなと感じました。日本人の気質の美德でもあるのかもしれませんが、遵法意識が高いため、一度でも踏み外したらもうだめという感じがします。価値観としてはどちらかが優れていて、どちらかが劣っているということではありませんが、少子高齢化の進むこの日本で、人的資源を無下に失うというのは、もったいないことだと思います。



今月活動予定

9月

- 2日 喜連川社会復帰促進センター薬物依存離脱指導
- 3日 ダックスとちぎ家族会講演 家族教室 再乱用防止教育事業県央
- 5日 ガイドポスト アディクションフォーラム実行委員会
- 7日 再乱用防止教育事業県北
- 9日 喜連川社会復帰促進センター薬物依存離脱指導
- 12日 東京保護観察所プログラム
- 15日 宇都宮保護観察所プログラム 再乱用防止教育事業県庁
- 16日 喜連川社会復帰促進センター薬物依存離脱指導
- 20日 再乱用防止教育事業県南
- 22日 宇都宮保護観察所プログラム 那須塩原市立高林中学校講演
- 28日 喜連川少年院プログラム
- 30日 喜連川社会復帰促進センター薬物依存離脱指導

発行所 郵便番号一五七―〇〇七二 東京都世田谷区祖師谷三―一―一七―一〇二号 定価100円
特定非営利活動法人障害者団体定期刊

編集 特定非営利活動法人栃木DARC

〒321-0923

栃木県宇都宮市下栗町 2292-7

TEL 028-666-8536 FAX 666-8537



栃木 DARC®

「トレンド」

3sc施設長 大吉 努

栃木DARCの事業

栃木DARCの事業の多くは、委託または助成を受けた形が多く、一般社会に向けての特定非営利事業と施設事業を行なっています。特定非営利事業は、一次予防としての乱用防止、二次予防の再乱用防止を多く含み、施設事業は、三次予防以降となる依存症からの回復のための場所とプログラムの提供を行なっています。依存症本人が誰かに薬物を勧めることで薬物問題が広がるリスクを考えると、これも乱用防止の一環であると言えるでしょう。



夜には気温が下がり、日中も過ごしやすい日が増えて参りました。皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。気象庁は夜になっても気温が下がらない今夏の気象について、異常気象という見解を示していました。数年前はゲリラ豪雨に代表される急な土砂降りが夏のトレンドでしたが、今後は今夏のような夜になっても気温が下がらない新しいトレンドに移行したのかも知れません。

さて、3rd Stage Centerでは、現在11名の利用者が日々プログラムに励んでおります。昨年度（約15名）と比較すると平均利用人数が減っていますが、側面的に見ればコロナ禍においても一定の社会復帰が出来ているものと理解しています。一方でコロナ禍の影響もあり、栃木ダルク全体で捉えると、入退寮の循環が滞りがちとなっております。直接的な利用ニーズが少ないことは、見方によっては良いことなのかもしれません。しかし、依存症が進んだ人が自分から支援に繋がりにくい特徴や、人との交流が減った社会状況などを踏まえると、地域には回復ニーズが潜在している可能性もあり、ダルクが必要な人に情報が行き渡っていないことも想定されます。このような状況を俯瞰すると、当たり前感じていた対面での交流が心理面だけでなく、情報交換の面でも重要であったことを再認識させられます。社会全体を見渡すと、現在は行動制限やコロナ対策のあり方も変化しています。これまであった交流やイベント、新しい繋がりを作る機会を増やし、ダルクを必要としている人たちが回復する場所を選べる社会の環境を取り戻していきたいと考えております。

ところで、ダルクの強みについて考えると、その一つにピア・サポートをベースにした共感性の高さが挙げられます。共感性の高さを二律背反に捉えると、それは利用者の心境を深く理解する強みであり、その一方で分かり過ぎるがゆえ、自他に葛藤を生み出す要因となります。自身が職員という立場に従事して日々感じていることは、特定の部分に深く共感することは、必ずしも良い支援ではないということです。支援という点では、自分がその人の何に理解を見出せるのかを見極めることが大切だと考えます。例えば、薬を使いたくなる心境を理解することは唯一正しい共感ではなく、それ以外の悩みや苦しみを自分なりに見つけて解釈することも共感です。後者の解釈に至る上で、使用経験の有無は必要条件ではありません。自己理解を得るために、当事者や専門職などの背景はあまり重要ではなく、本質的に大切なことは、自分や他者を受容すること、そのための自己研鑽だと思えます。当事者など特定のカテゴリーを形容する言葉のフレームにハマり過ぎることは、自分自身にステレオタイプな考えを植え付けることに繋がります。それは物事の捉え方に影響を与え、自他の成長を妨げる要因となるので、日々意識したいものです。

ダルクでの日々は単調に感じる一日も修了への道を一步進んだ一日です。皆が安心してその道を進めるよう、プログラムや環境を整えていくことが自身の役割だと感じています。これからも皆で成長していきたいと思えます。



「今の気持ち」

依存症のシュン

2nd StageCenter

～回復～

2nd StageCenterは、回復の中心を担っています。

ある程度のクリーンを持ったメンバーが、各々のプログラムを深める時期にあたるので、過去を正しく振り返ること・メンバー同士の関わり方などをグループワークに参加しながら試行錯誤して自身の回復につなげていきます。

回復を確かなものにしていくための重要な時期をこの施設で過ごしています。



やりかたね！

覚醒剤依存症のシュンです。私が覚醒剤を最初に始めたのが17才の時でした。なぜ始めたのが両親と関係が上手に関係を保つことができない事でした。お袋とは常に対人関係を厳しく注意され近所の目ばかり考えるお袋でした。おやじには身だしなみやお袋と同じく対人関係、バカ息子やお前のせいで離婚をする、近所からは地元で有名なバカ息子だとおやじやお袋はそのように思われているから更生しろと何度もゆわれてきました。17才の時におやじと大げんかして家を飛び出しました。その時に地元の先輩の家に住むことになりました。ただその先輩はかたぎではなくヤクザでした。最初はヤクザだから家に住むのが抵抗感があり少し怖いイメージがありました。その先輩の家に住み初日に先輩と先輩と関係のある人がいて先輩は覚醒剤を炙り吸っていました。先輩と関係のある二人は覚醒剤を注射器で血管に入れてました。その二人の人には注射器を使えば物凄く気持ちいい快樂も物凄くあじわえるといわれました。ただ私は血管に注射をするのは断りました。なぜなら注射をするのが昔から嫌いでした。その時に考えたのが先輩たちといれば覚せい剤中毒になる私はそうゆう風に考えていました。家を飛び出し両親と離れ本当にその決断が正しかったのか今の私が正しいのかこのまま人生を歩んでいいのか真剣に考えは始めました。体もボロボロになり覚せい剤中毒でした。その時に先輩が覚せい剤で逮捕されて今までお世話になり次は私が覚せい剤で逮捕されるかもしれないと恐怖で心がいっぱいになりました。ただ両親にはバレたくない心配おかけたくないまたバカ息子が私たちに迷惑をかける近所ではすぐに話が広がり地元ではまた一段と評判が悪くなると思い逮捕だけされたくないと思いました。心の中では先輩が逮捕

されてこれからは覚せい剤をしないと意思しました。お世話になったけど今ならまだ間に合う今までの関係から抜けられると思いはっとしました。ただ日が経つにつれ覚せい剤の欲求がはいり今までたくさん寝ないでしてきたからその影響で欲求がきているだけでそのうちにおさまらだろうと軽く考えていました。だがしかし欲求がおさまるのがなかなかおさまらなくなり苦し戦いをしてきました。そんなある日覚せい剤を使っている際に警察から職務質問され覚せい剤の使用で逮捕され初めて刑務所に行きました。私はまだ21歳で長野県にある松本刑務所に行きました。刑務所のしきたりがありものすごく大変でした。社会ではすることの無い何度も同じ受刑者と喧嘩をしていました。もちろん仮釈放を貰うつもりもなく、全部で工場が7工場あり何度も同じ工場に行きました。仲が悪い人がいて工場に1日だけで喧嘩で懲罰を受ける繰り返し全受刑者も舐められたくないメンツばかりの人でした。刑務所から出所してまた欲求に耐えられなくなり覚せい剤を使いまた刑務所に行き今度は福島刑務所に行きその時に考えたのは覚せい剤を絶対にしない、今まで沢山の人の心配を掛けてしまい最後まで信用や身近なお世話をしてもらい心から感謝をしています。今は会おう人すべてが私の回復に繋がっているように思います。今まで出会えた人これから出会える人も感謝できますように。



「自分が歩くべき道」

ギャンブル依存症のサラ

3rd StageCenter

～社会復帰～

3rd StageCenterは、社会復帰間近の回復後期・社会復帰期を担う施設です。1st StageCenterで断薬を目的として規則正しい生活や体力回復をし、2nd StageCenterで個々のプログラムを含めて過去の整理や人間関係の作り方を学んだメンバーが、実際の社会に近い環境で社会性の獲得と、健全な家族及び人間関係を身につけてもらう事を目的としたプログラムを組んでいます。本人の責任において生活するために起床、就寝などの時間も特に設けず、職場に出勤するのと同じようにプログラムの開始時間も設定しています。主体性を強化して社会復帰の準備を行う場所です。

早いもので、こちら3SCに入寮させて頂いて、間もなく2年と7ヶ月を迎えることとなります。今年の勤労感謝の日で68歳になる、ちょっぴり普通ではない爺さんと言っちゃいましょう。入寮前の30年間ほどギャンブルに問題を抱え、その上数年前から体に病氣も患っていたのですが、私がかぶしの白旗を掲げると間もなく、実姉がこちらの施設に運んでくれました。でも、それから大変だったし、実は今も何やかんやと大変な毎日なのです。それを語れば愚痴になるので、書きたくないのです本当は。でも、ほんのちょっとだけ紙面を頂きたい。どうも字数が足りない予想になっているんです。実は、私の左眼は極めて悪い状態で、見え方が極端に悪いので、両目を使った見え方が変なのです。その為、精神的に嫌な気分や不安感が湧き上がり、特に作業時には苦痛を感じたりします。それに、難病に依る症状かと思われるのですが、体の様々な変調や不調は日常茶飯事といったところです。

とここまで書いて、自分の中に生じたものは、これを書くことで自分は何を伝えたいのかと言う自問です。まさか、「こんなかわいそうな爺さんがいます。是非、愛の手を」ではあるまい。だが、そこに近いものしか感じられないではないか。情無いと思いつつも、回らない頭で考えてみた。これは私の「癖」なのではないかと。些細な事柄を言っているけれど、ここに見てとれる考え方には、私の思い悪癖があるようだ。

「俺は大変なんだ」と主張する癖。「だから回復なんか望めやしない」と考える癖。

「相談や対処も出来ないくせに愚痴る」癖。（何とか形になった？もういっぱいいっぱいだよ。おかしいとこない？）こんなところでしょうか。そろそろ「俺は」「俺は」打ち止めにしたい、そんな年頃？でしょう。最近、書画家の小林芙蓉さんが書かれた本を熟読しています。回復の進まない

私の、生き方の参考になるものを探しながら。その最中に感じた事は、芙蓉さんが目指す生き方とステップの原理は似ていると言う思いでした。芙蓉さんの最終的目標は「本当の自分が歩くべき道を見つける」ですが、ステップの目指すところもそこではないのでしょうか。それに手段としての行いや考え方も類似しています。芙蓉さんが「自分よりも他人の人の事を先ず考えよう」と言えば、ステップは「仲間のために行うサービスや分かち合いを奨励」。また大切な思いや気持ちに関しても、「思いやり」「ありがとう」「調和」「礼」と同じものを掲げています。そして「祈り」。双方共重要さでは同じですが、手法は違って、芙蓉さんがお経を唱える事を求めるに対し、ステップは「愛ある神との暖かな交信」と言えるでしょう。

私の最終目標、それは芙蓉さんに倣い、「本当の自分が歩くべき道を見つける」としましょう。今書きながら決めました。只、芙蓉さんの本を読んで頂ければ分かりますが、全く簡単ではございません。「見つける」事自体が大変なのです。私の「大変だ」とは大違い。これからその旅をどれだけ続けられるか、そしてどんなものがみえてくるのか…。予想もつきません。どうか神の御加護を…。仏の御慈悲を。そうですギャンブルはいけません。唯々祈ることに務めましょう。



Community Farm

～農業～

栃木ダルクに通うメンバーの中には通常のプログラムが適さない方も少なくありません。CF（コミュニティファーム）では、薬物依存症以外にも社会復帰を目指した際に問題（高齢である・重複障害がある）を抱えたメンバーがゆっくりと自分なりの回復を深めて、それぞれの社会復帰の形を探ってもらうための場所です。他の男性施設とは違い、テキストを使ったプログラムも少なく、ステージ毎に居場所を変える事もあります。農作業やボランティアなどを活動の中心にしています。金銭管理や処方薬の管理、家族の再構築など基本的な部分に時間をかけて丁寧に社会復帰の準備を行なっています。

那珂川CFに移動になって三か月が経ちました。初夏から盛夏を過ごし、ようやく暑さも和らいできたかと感じています。それにしても今年の夏は暑かったですね。那珂川の生活は農作業が中心であり、体調管理が重要なのですが、寝苦しい夜が続きかなり苦労しました。

那珂川の生活では農作業以外のときには温泉に行ったりカラオケにいったりと楽しみも多くあります。中でも川遊びと海でのバーベキューが楽しかったです。酷暑日に水の中で体を冷やし、浮き輪につかまり流れに体をまかせプカプカと浮かんで過ごし、また県内の全施設の仲間が集まり、旧交を温めることができました。皆で協力をしてバーベキューの準備や後片付けをしたり、いろいろな年代の仲間と波遊びができた事はいい思い出です。

さる七月五日には保護司の先生が来所され、ジャガイモ堀をしました。先生方の前で話をさせていただく機会がありました。自分は人前で話すのは苦手なのですが、自分自身を振り返るのにはいいチャンスだと思い引き受けることにした次第です。やはり人前で話をさせていただく以上、真剣に内容について考えますし、それが今までの人生について考え、自分が依存症になった原因など、自分の弱さや将来についてなど多少は人生に正面から向き合うことができたのかなと感じています。こちらの生活では日々の忙しさを言い訳にして、人生や自分の性格、依存症について考える事を怠っていたため、非常にいい機会を与えていただけたと思っています。

さて、こちらの農作業では多くの作物を作っていますが、特に茄子は出荷をしてい

「将来」

依存症のドウ

るので収穫、選果、消毒などを細かく行っています。やはり出荷する以上、より良い物を数多くと考え日々努力している毎日です。早朝からの作業も多く大変だと感じることも多々ありますが、作物が日々成長し、より良いものが多く収穫できたときには充実感もあり、毎日の生活にも張り合いがあります。

自分が入寮する以前、長期間労働をせず、だらだらと何も考えず、今考えると生きているのか死んでいるのかわからない様な時間を過ごしていました。入寮以来常に考えているのは「なんて無駄な時間を過ごしたのだろうか」ということです。二度とそのような思いをせずに済むためには、やはり規則正しい生活を送り、仕事に就き収入を得て自立することだと考えています。そのためにもここ那珂川で生活を送ることが将来に役立つと考えています。こちらでの労働は世間一般の皆様からするとまだまだ甘いものだという自覚はありますが、それでも自分にとっては久しぶりの労働であり、卒業後の生活にプラスになると考えています。このような環境に身を置いているせいか、少しずつ将来について考えるようになりました。まだまだ具体的に考えをまとめる段階にはありませんが、将来に対する楽しみが出てきました。何も考えずに生きてきたあの頃から比べると幸せを感じる日々です。また同時に不安を感じる事もありますが、それもこれも未来に目を向ける事が出来ている自分がいるからだと思います。これからは不安や恐れに怯む事無く、夢や目標に向かって行きたいと思っています。

3 Stage System の概要

AAやNAなどの自助グループの12ステップを基に、意味を抽出したものを3段階にわけ、Stage 1～3を最短12ヶ月で行います。

Stage 1

①認める②信じる③まかせることを通じて、自分のアディクションの問題を認め、助けてくれる存在を信じ、回復プログラムに自分の回復を任せるといった導入の部分を行います。

Stage 2

①過去の整理②本質を探る③欠点を取り除く④手放す⑤準備する これまでの問題の分析をし、自分の問題の本質を探り、アディクションに繋がる部分を取り除き、自らの問題を手放し、社会の有用な一員となる準備をしてもらいます。

Stage 3

①行動の変化②実行し続ける③配慮④継続として、これまで行ってきたStage 1、2のプログラムを踏まえ、どのように行動を変化させていくか、それを実行し続けるにはどうしたら良いか、また他者とのコミュニケーションはどのようにするか、これまで行ってきたことを社会の中で実践し続けていくには何が重要かを見出していきます。

8月にステップアップした仲間

1sc

- ・マックス リーダー～チーフへ
- ・マーナ サポート～リーダーへ

2sc

- ・該当者なし

3sc

- ・該当者なし

CF

- ・該当者なし

PP

- ・エム Stage 1～Stage 2へ
- ・マスミ ミサキ アミ サブリーダー～リーダーへ



8月の献金・献品

(献金) 那須トラピスト修道院様 他匿名者13名

(献品) 匿名者7名

とても助かっております。栃木ダルク一同感謝しています
献品のお願い

- ・修了予定者がこれから数名いるので、日用品、家電一式、原付バイク、自転車、その他自立して使用できるものがあればよろしくお願いいたします。
- ・1st StageCenterからソフトボール用品、スノーボード用品あればよろしくお願いいたします。
- ・CFから農機具関係（草刈機、農作業用品、トラクター）等あればよろしくお願いいたします。

施設報告

1st(導入) 15名 2sc(回復) 7名 3sc(社会復帰) 11名 CF(農業) 9名 PP(女性) 16名計58名で活動しております。

各々の施設でステージ毎のプログラムを実施しております。



pp

「真のクリーンを目指して！」

依存症のミー

Peaceful Place

～女性～

PP(ピースフル・プレイス)は女性専用の施設です。ファースト・セカンド・サードの全過程を同じ場所で過ごしなが、それぞれの回復を進めていきます。女性依存症者の多くは、それまで生きてきた背景に様々な問題を抱えています。生きるための道具だったアディクションを手放していくとき、経験を共有し合える仲間が小さな安心感を積み重ねてくれます。その安心感が私たちを自己否定ではなく自己受容という形に変えてくれるのです。安全を感じながら回復を進めていくことができる場所とプログラムを提供すると共に、自分を大切に生きる方を身につけてくれるように願いながらサポートを続けていきます。

こんにちは。2度目のNLを書かせて頂くことになりました。依存症のミーです。入寮してから、1年6ヶ月を迎えました。最近の私は長いメンバーにもなり、すっかりダルク色に染まったように思えます。あれから色んな問題にぶつかりましたが、転ばず逃げずに続けてこれたこと、支えてくれた仲間や施設に感謝です♪ 6月にサブリーダーに復帰し、自分の回復と成長の波も上昇している最中。時には失敗もしますが、学びと経験の1つとして深刻にならずに取り組む姿勢を保っています。以前は些細なミスに重く感じて「ミスをしてしまうのが怖い」と臆病になっていた事もありましたが、復帰後の私はキャパや物事の捉え方も変わって、プログラムの効果を実感しました。そんな“気づき”が増えステップの理解も深まり、クリーンも伸びて思考もクリアになってきました。シラフで居続ける事の大切さを痛感。そんな私ですが、7/11にステージ3に上がることが出来まして、役割では薬作りを担当させてもらえる事になり責任感も増してきました。役割を通して成功体験を積んで、自信や自己肯定感を高めたいです。就学を目標としていますが、過去の失敗を生かして今回こそ叶えたいと強く思っています。ブランクはありますし周りと比較して落ち込む事もあると思いますが、自分のペースを守って無事に高卒が取れたらなと思います。先日、他施設のフォーラムでお世話になった施設職員の方に会うことができ挨拶をしたのですが、嬉しくて涙が出ました。(笑) 1年半程越しの再会でしたが、私は私で回復を歩んでいる事や、今クリーンで生きている事は本当はすごい事なのかになって感じました。今まで掛けられたメッ

セージが私自身を変えてくれた実になっています。今は自分の内面について管理する事や、アディクションを使わないで生活することに慣れてきました。アディクションに頼らなくてもいいんだと思えるようになった事。クリーンな自分であるように悪影響になるものを手放したり、健康的なものに変えていく事。選ぶもの、捉え方、行いを変えて本質を改善する事を意識して生活する事。入所したての頃と比べると、考えられなくらいの回復と成長を遂げた気がします。私に回復の基盤を与えてくれた“Mさん”には感謝しきれないです。いつか家族再構築ができれば、自信を持って会える自分になりたいです。出院後の私はとても未熟でした。回復のルールには立っただけです。最後に面会したあの日は、アディクションを手放すことに怯えていました。今の私は、回復に責任を持って行動しています。ここまで変わる事に時間はかかりました。母と父を何度も泣かせ、嘘をつきました。五体満足で産んでくれたのに障害を自分自身で生んでしまったこと、後悔しています。過去は頑張ること、謝罪する事しかできなかったけど、プログラムに繋がった今は省みることが出来ているし、あとは続ける事…。継続は力なり…ですね。閲覧ありがとうございます！



「凡庸なる人間の姿」

依存症のゼキ

Ist StageCenter

～導入～

Ist StageCenterでは、回復初期に、生活習慣の改善と健康的な肉体を取り戻す事に主眼をおき、規則正しい生活を目的としています。グループワークや学習型のプログラムは少なくして、その分、作業やスポーツなどの体験型のものを多く取り入れて、使わない生活に楽しみが感じられることに重きを置いています。依存症者は充実感、安定感、所属感を取り戻す必要があり、この三つをできるだけ効率よく感じられるようにプログラムは組まれています。



ある日突然、覚醒剤は私の目の前に現れました。あれは確か私がまだ小僧だった25歳の頃だったと記憶していますが、いつものようにバイト先で仕事をしていた時、その先輩がおもむろにポケットの中からガラス製の何かを取り出し「ゼキくんもやってみる？」と言って来たのです。私は「なんですかそれ？」と聞いたところ「S {エス}」と一言。私はその横文字の響きに「カッコいい！」と、えらく感動してしまい、すぐさま即答しました。「はい！是非！」。お手製のガラスパイプをライターで器用に炙り、白く立ち込める煙を口から吸い込み吐き出す姿が妙にカッコ良く見え、「こりゃあ何だかわからないけどイカしてるぞ！」と思い、その先輩の指南を受けながら初めてのS {エス} 体験をしたのです。始めは炙りだったこともあり、イマイチその効果を実感することが出来ず不発に終わった感がありましたが、日に日にその威力を知ることになっていきます。それから少ししてその先輩はそれが覚醒剤であることを私に打ち明け、覚醒剤の素晴らしさを私にこんこんと論ずるように語り、なぜかは分かりませんが聞いてもいないのに売人の電話番号を私に教え、その数日後に薬の過剰摂取により死んでしまいました。覚醒剤のイロハを教えてくれたその先輩の死は私にとってとても意味深いものとなりましたが、私はその先輩の意思を継ぐべく、益々覚醒剤にハマっていきました。数年後、燃費効率の悪さから使用方法を炙りから注射器に変え、私のアディクションはどんどん進化していきます。特に仕事での効果効能が素晴らしく、職場での成績はうなぎ昇り。悪化していた会社の業績をV字回復させる程の活躍を果たします。そし

てそれだけでは飽き足らず、自ら起業してしまいました。電話料金の割引サービスの取次事業から始まり、自動車運転代行業、新車、中古車の販売業、携帯電話、PHSの販売業、内職の斡旋業、アダルトグッズの通信販売業、託児所の開設などなど、自分の手の届く儲かりそうな仕事にはすぐ飛びつく勢いと若さがその時の私の売りでした。まだインターネットが普及する前だったので、この程度で満足していましたが、ネット環境が整っていたらまだまだこんなものではなかったと今になっては思います。そして、その傍らには常に覚醒剤。自分が生きていくための重要なアイテムの1つ。そのアイテムがあればどんなラスボスだって恐れることはありませんでした。

仕事の何たるかを教えてくれたのは覚醒剤。人生の酸いも甘いも教えてくれたのも覚醒剤。とても皮肉なことですが本当なんだから仕方がない。しかし、これからはその必須アイテムを持たずに戦わなければいけない、果たしてその結果は？！誰にもわからないんですよ。

アントニオ猪木氏の名言に「この道を行けばどうなるものか、、、迷わず行けよ、行けばわかるさ」というのがありますが、まさにその通り行ってみないとわかりません。

プログラム紹介

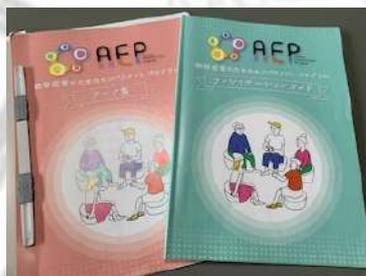
コン・ゲーム

コンゲーム (con-game)とは、信用詐欺という意味です。かつては薬物を使い続ける為に他人や自分自身を騙す必要がありました。薬物の再使用に至る生活習慣や感情の流れ、行動と思考パターンの見直しに目を向け、それを変えていくにはどうしたら良いかをブレインストーミングやロールプレイング、時には絵を描いたりして考え、答えを導いていくプログラムです。



エンパワメント・プログラム

エンカウンター・グループは心理学者のロジャースが開発したグループカウンセリングの手法です。欧米でも実践されている治療共同体エンカウンター・グループをもとに日本で取り入れやすいよう工夫されたものがエンパワメント・グループです。エンパワメント・グループの特徴は、質問とフィードバックです。相手に気づきを与える質問と、その人が気付いていない肯定的な側面を伝えるフィードバックが安全な環境の中で行われる事で、グループに参加する一人ひとりに気づきと回復のための力がもたらされます



編集後記

9月に入り暑さも和らいできた今日この頃です。皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

これからは実りの秋、食欲の秋、暴飲暴食に気をつけたいと思います。

皆様もお身体ご自愛くださいませ。

編集秋葉